

ハワイ大学への留学を通して

今回ハワイ大学でのワークショップに参加し、現地の教授や生徒、全国の大学から集まった医学生との交流を通し、感じたことが大きく二つある。

一つは物事の本質を押さえることの重要性である。このことは日本の医学部の教育のシステムについてもあてはまる。ハワイ大学で導入されている PBL という学習方法を多くの日本の医学部でも取り入れている。しかしながら、私は PBL という学習方法自体、日本の学生に向いていないと感じる。ハワイ大学で PBL を導入した理由は大きく二つ。一つ目は学校の関係者（教授と学生、学生同士）の距離を近くすること。もう一つは自主的な学習をし、疑問に思ったことを自分なりに調べ、ポイントを押さえて説明することにより重要な事項を見抜く力を磨き、自己の理解を深めることである。私は様々な大学の医学生と交流し、それぞれの大学の PBL の状況ややり方を聞いた。残念ながら、日本での PBL は本来意図された目的が全く達成できていないと感じた。私の大学に限って言えばチューターが PBL のやり方を知らなかったり、全く学生に対し興味を示さなかったり、さらには質問されても専門外だからわからない、と言う始末である。PBL やり方も知らないチューターに評価をされる身としては到底納得がいかないのは当然ではないだろうか。ハワイ大学のカリキュラムにおいて PBL は大きな割合を占めている。自分が疑問に思ったことを調べ上げ、まとめるのだから当然時間がかかる。しかし日本の場合はどうだろうか。PBL の間には講義がつまっている。試験が重なる場合もある。一番時間をかけるべきところに思うように時間がとれていないのが現状である。PBL という学習方法は症例検討および学習事項の列挙、自己学習、学習を通して得た知識をグループ内で発表するという3つのステップに分かれている。一番大切、かつ時間をかけるべきなのは二つ目なのではないだろうか。ところが日本の大学（少なくとも私の大学）では三つ目のグループ内での発表に一番時間をかける傾向にある。それぞれが調べてきたことを10分以上もかけて事細かに説明してもその場で頭に入るはずもなく、結局集中していないのが現状である。さらには全部説明してもらった気分になるため疑問も残らず、自分が担当した事項以外は学習せず、試験の前に一気に覚え込む学習をしている。本来の PBL であれば一回の症例で多くの知識が学べるはずである。だが先に述べたような理由によりそれは機能していない。PBL での学習をカリキュラムに導入しているのであれば、もっとこの学習方法の本質に目を向けて改善すべきではないだろうか。

今回の留学を通して感じたことの二つ目は、ある事象が起こったときにその理由を考え、分析することの大切さである。このことは医療現場では当然のことながら、日常の我々学生の学習への応用も可能である。日本の医学生は欧米（特にアメリカ）、海外の大学生に比べ勉強しないというのはよく耳にする。私の大学でも大きな問題の一つでもある。たしかに自分を含め学生の学習が不十分なのはまぎれもない事実である。ただしこれには理由がある。現在の日本のシステムでは、医師国家試験において下位 10%に入らなければ、合格

する。つまり人並みに勉強してさえいれば、事実上何科の医師にでもなれるのである。その「人並み」が勉強しなくなったらどうなるかは明白である。それに対しアメリカでは大学での成績、国家試験の点数により、研修ができる病院、進める診療科が決まる。大学での学習の量や努力がそのまま反映されるのである。日本は医学部に入るまでのみが競争、アメリカは医学部に入ってからでも競争なのである。つまり日本では人並みに努力しようが人の3倍努力しようがあまり結果に影響しないのが事実である。人間というのは誰もが安きに流れるものである。少ない努力で同じ結果を手に入れられるのであれば最小限の努力で、と思うのが妥当ではないだろうか。大学の試験においても重要な項目が多く出題されると思いきや、重箱の隅をつつくような問題が出題される。大事なことから押さえていくような系統だった学習ではなく、過去問を解きあさり、今必要かどうか分からないような細かい知識を頭に詰め込み、とにかく合格することだけが目標の学習になっている。基礎的な部分や重要事項を押さえていけば合格、それ以上の学習をしている者についてはもっと点数が取れるような試験（努力した分報われる試験）であればたいいの学生はもっと自ら学習をするのではないだろうか。学習しない者を蹴落とすよりもしっかり学習する者をどう差別化するかに主眼をおくべきだと私は感じる。

このように、なぜか、と理由を考察することにより、具体的に対策が考えられる。それをせずに、学生が勉強をしないからという理由で部活動を制限したり、試験を難しくしたり、出席を厳しくしたり、といった付け焼刃な対応をしたところで本質的な改善にはならない。試験前に知識を覚え込むだけの学習をしている学生と何ら変わりが無いのである。佐賀に残る、良質な医師を育てたいのであれば、大学側はカリキュラムを見直し、海外の学習方法を取り入れるのであればその本質を失わない形で導入するべきである。佐賀に残る医師が少ないのであれば、その理由を考え、対策を練るべきではないだろうか。

以上述べてきた二つのことについて学生側はどのように捉え、現状を変えるためにどう行動すべきか。そのことについて簡潔に私の意見を述べようと思う。前にも述べたが、日本の学生は高校を卒業し、厳しい受験戦争を勝ち抜いて大学へ進学する。医学部ともなれば中には小学生、中学生の頃から勉強ばかりしてきた者も少なくないだろう。彼、彼女らにとって唯一「休憩」できるのが大学なのである。医学部に入るという大きな目標を達成し安心し、周りからはもてはやされ、医学部に入学した本来の意味を見失うのである。訳も分からず受かるために勉強ばかりしてきたのだから無理もない。しかも日本の医学部は6年間である。6年後に医師国家試験があるとされても実感が湧かないのである。中学1年生に大学受験の勉強をしろと言っているのと何ら変わりが無い。私は、人が努力する、勉学に勤しむのは二つの条件があると考え。一つはきっかけ、動機があること。二つ目は努力した結果が本人の利益につながる（もしくはその可能性がある）かどうかである。この二つを見失っている者にいくら勉強をしろと言っても無駄骨である。日本の学生、特に難関学部と呼ばれる学部生はまず何よりも自分の将来像を見定め、それを達成するためにどの段階で何をできていなければならぬのかを考えるべきである。また大学側はその

ような機会を数多く提供し、宣伝すべきである。いくら大学が「自ら学ぶ」所だとはいえ、今まで与えられた学習しかしていない日本の学生にとっていきなり自ら学べというのは不可能である。また、これも個人的な見解ではあるが、医学部生は他学部に比べ極端に英語力に劣り、思考の視野が狭いと感じる。何人の学生が今まで日本以外の大学のキャンパスに足を踏み入れたことがあるだろうか。何人の学生が他国の医学教育や医療制度についての知識があるだろうか。何人が将来外国で臨床、研究をしてみたいと思っているだろうか。たいていの学生は毎日繰り返される講義に出席し、試験前に知識を詰め込み、試験後に忘れ去るという学生生活を送っていると思う。(私はそうだった。) それではだめだということに気付くには、自分が置かれているものとは異なる環境へ飛び込んでみるしかない。今の学生には外の世界を見ようとする野心すら欠けているように思う。人を相手にする職業につこうとしているのであれば、もっと他人に興味を持ち、様々な世界の人と交流するべきではないだろうか。アメリカの4年間という短い時間とは違い、我が国の6年間という長い大学生活を生かす一つの良い方法だと私は思う。

今回の留学はワークショップ自体1週間と短かったが、日米の教育制度の違い、医療の違いを含め今まで述べてきたような事を考察する絶好の機会であった。しかしながら大学からの参加者が自分一人で、大変情けなかった。こういうプログラムはもっと大々的に宣伝し、より多くの学生が参加し、その後も活発に活動できる環境を作るべきだと私は思う。医学部において留学は必要ないと思う人は多いかもしれないが、それは全くの見当違いである。医学部という小さな組織に属しているからこそ外の世界を知り、自分が属している組織はたまた日本という国を外から見て、考えるというのは視野の広い良質な医師になる上で不可欠であると私は断言できる。私は今回の留学で得たものを大学に可能な限り還元し、佐賀県の医療にとって、よい影響を与えられるよう最大限の努力しようと思う。